

南米ボリビア医療支援と千葉県がんセンターの関わり

NPO法人 医療・福祉ネットワーク千葉 竜 崇正

明治になり、貧困にあえぐ多くの日本人が夢を求めて南米に移住した。日本からの最初の移住先はペルーであったが、奴隷にされたため、多くの日系移民はアンデスを越えボリビアに逃げた。ボリビア日系人は最も苦難に満ちた移民の歴史を背負っている。

40年前の千葉県がんセンター発足時に、ボリビアから **Arnold Hoffman** 先生が千葉県がんセンターに留学してこられ、5年間の研究生活を送られた。**Hoffman** 先生はボリビア帰国後に厚生大臣になり、日本政府に働きかけて **JAICA** の協力で **Sucre** と **La Paz** に胃腸病院、**Santa Cruz** に日本病院ができた。この病院サポートのために澤田元センター長や、田中昇元研究局長は1979、81年にボリビアを訪れている。

さらに日系移民2世である神谷利明先生やボリビア地元医師の熱心な要請に応える形で、慶応大学や東京女子医大など日本の有志が集まり「ボリビア日本消化器病学会」が組織され、1988年より2年に1回開催されるようになった。竜も初めてこの時に参加し、ボリビアでの手術指導やなどを行ってきた。このような経緯で当NPO法人も積極的にボリビア医療支援にあたることとしたのである。

